

東京神學大學報

T O K Y O U N I O N



THEOLOGICAL SEMINARY

No. 336

MARCH 6, 2026

●卒業礼拝説教

「人の子の到来を待望しつつ」

日本基督教団 阿佐ヶ谷教会 牧師 古 屋 治 雄

●卒業式励ましの辞

日本基督教団 総会議長 雲 然 俊 美

日本基督教団 新宿西教会 牧師 深 谷 春 男

●全学修養会・基調講演

「教会を建て上げる礼拝」

日本基督教団 銀座教会 牧師 高 橋 潤

「教会を建て上げる礼拝 プロテスタントにおけるリタージカル・フォーメーション」

カンバーランド長老キリスト教会 田園教会 牧師・日本聖書神学校 教授 荒 瀬 牧 彦

「The body of Christ ～教会を建て上げる牧会～」

日本基督教団 総会議長 雲 然 俊 美

●日本伝道研究所主催講演会

「日本教の極点：母子の情愛——私の日本人論探究」

日本基督教団 戸山教会 牧師・青山学院大学 名誉教授 西 谷 幸 介

●第54回教職セミナー 主題講演

「旧約聖書における祈り：執り成しの祈りを中心にして」

東京神学大学 教授 田 中 光

●新卒業生の声

2025年度 修士学位授与者提出論文一覧

《聖書神学専攻》

榊原かをる マルコ福音書における「群衆」と十字架の救いについて——物語批評による考察

関口 直文 ヨハネ福音書における $\pi \alpha \rho \acute{\alpha} \kappa \lambda \eta \tau \omicron \varsigma$

小野恵理子 放蕩息子の物語再考——Venture of Bios の視点より

《組織神学専攻》

内田幸四郎 P. T. フォーサイスにおける教会論

金井 恭子 D・ボンヘッファー 初期の神学における教会論

金 賢俊 植村正久と海老名弾正の福音主義論争
——両者のキリスト論の違いについての一考察

小林 光恵 カール・バルト『和解論』における教会論——キリストにある共同体と個人

重村 智計 エーミル・ブルンナーのエクレスシアについての考察

三永 信泰 植村正久の伝道論

呂 寅讚 宗教改革における聖餐論の神学的展開——カルヴァンを中心として

吉岡 優介 フレッド・B・クラドックの帰納的説教における会衆の参与について

「人の子の到来を待望しつつ」

マタイによる福音書 第10章16～25節



日本基督教団 阿佐ヶ谷教会 牧師 古 屋 治 雄

2026年東京神学大学卒業礼拝の喜びの時を今ここに与えられています。卒業していく皆さんのみならず、この伝道者養成と派遣の営みに参与しているすべての人々にとって、伝道者を新たに送り出す「実りの時」がここに与えられています。

卒業生の皆さんはいよいよ神学生生活を終え、おそらく期待や不安が入り混じっている中で今遣わされていく具体的な準備に入っておられることと思います。これまでに皆さんの献身の志を支え導いてくださった神様は、今までに増して伝道者としての歩みを祝福してくださり、新たに教師としての権能を与えておられます。

マタイ福音書10章で主イエスが弟子たちを派遣され、9節以下をみると具体的な指示をしておられます。これらの主イエスの派遣の言葉は、私たちが卒業生を送り出す状況とうまく合致していないと思う点が多々あります。博士課程前期2年の皆さんとは今学期、それぞれ遣わされて直面する事柄を視野に入れて牧会学演習を共にしてきました。私たちには派遣されていく新しい伝道者を心待ちにしてください。群れがあり、卒業生の皆さんは待望されて遣わされて行きます。「私があなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り込むようなものである」（16節）とか、「人々には用心しなさい」（17節）との主イエスの言葉は、卒業生を迎えてくださる群れのこ

とを指しているのではありません。ここで語っておられる弟子の派遣は、まだ教會的な基盤がほとんどない、新しい伝道地に向かう時の派遣の言葉であり、その際直面する厳しい実情が伝えられていると思われまふ。このような伝道状況は、何時の時代でも、どのような文化的背景があっても、イエス・キリストの福音を宣べ伝える主の教會にとつて実は変わっていないのではないのでしょうか。なぜならば、教會が拠つて立つ福音は聞く人々にとつて、異質な呼びかけであると言わざるを得ないからです。「天の国は近づいた」との福音は、「良き知らせ」であることには間違いないのですが、聞く者に審きを迫る言葉でもあるからです。

しかし主は、主の十字架の死と復活の出来事を伝える者を守ってください。好意をもって弟子たちを迎えてくれる家を備えてくださり、私たちが語る伝道の言葉を受け入れる人々を興してください。私たちが遣わされたところで、そして伝道者を迎える教會は自ら立っている地で、しっかりと根を下ろして御言葉を宣べ伝えていかなければなりません。そして、福音が福音として受け入れられるためにあらゆる賜物を駆使して語弊を恐れず言うならば「うまくやっていく」ことが求められています。しかしそれは教會内において人間関係をうまくやっていくことではありませんし、教會が立

てられている周囲の人びとと人間的に仲良くやっていくことでもありません。「蛇のように賢く、鳩のように無垢でありなさい」との主の言葉に即応できるよう私たちに求められています。

主イエスは言われました。「あなたがたがイスラエルの町を回り終わらないうちに、人の子は来る」（23節）と。ここには終末論的な緊張が溢れています。「教會の時」を託されている私たちは、その群れを守り、積極的に周囲に伝道し、主の伝道命令に仕えます。私たちは伝道による「収穫」が得られないと思ひ焦り、教會としてどれだけ業をやり遂げているのだろうかと落胆することがあります。

しかし私たちは自分の力でこの働きを全うするものではありません。私たちの働きが徒勞になり、この世の力に敗北することは決してない、と主は私たちに呼びかけておられます。やがて必ずキリストが到来され、私たちが参与している伝道の御業をキリストご自身が成就してくださるのです。天の国の御支配がキリストによってこの地上に実現されることを私たちは確信することができます。それはすでに私たちに聖霊が注がれているからです。御国が完成されるまで私たちは聖霊によつて支えられ導かれています。新たな伝道者がこの地上に立てられたことを喜び感謝して、共に「教會の時」を歩み抜いてまいりましょう。

学長室から

学長 神代 真砂実

この学報がお手許に届くのは、本学での卒業式のタイミングに合わせてということになります。この時季に繰り返し思い起こす聖書の言葉の一つは「信仰によつて、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです」（ヘブ11・8）です。

もちろん「行き先も知らずに」というのは卒業生たちには当て嵌まりません。年度の後半、赴任先の教會と連絡を取り合い、そして、ほとんどの場合は教會を訪ね、説教などの奉仕をする機会を持った上で赴任していきます。全く何も知らないということは、ですから、あり得ません。

とはいえ、実際に赴任してみれば、やはり、いろいろなことが起こります。予期していなかったような試練に見舞われることもあるでしょうし、想像もしていなかったような喜びに出会うこともあるかもしれません。そのように考えれば、つまるところは「行き先も知らずに」とあると言つて差し支えないように思います。しかし、神様に「召し出され」たので「出発」します。伝道者として出発するのです。

見送る側としては、心配もしまふし、寂しさも覚えます。けれども、どこかで羨ましく感じている自分があることにも気づかされます。新しいことへと乗り出していく姿に憧れを感じながら、神様の祝福と導きを祈って、送り出します。

「キー アッター イマディ」

日本基督教団 新宿西教会 牧師
深谷 春 男



卒業生の兄弟姉妹。今日は卒業の晴れの日、おめでとーございませす！
皆様のこれからの伝道生涯の上に、主の栄光が輝きますように！
私は1979年3月にこの東京神学大学の礼拝堂において、皆様と同じように卒業の恵みにあずかった者の一人です。その時29歳。若かったですね。当時の学長でありました竹森満佐一先生の導かれる卒業の時、胸を弾ませて、最高の人生へのチャレンジ！と、心が燃えておりました。あつという間に、48年も経ちまして、後輩の諸君に、今、お祝いの言葉を述べることになりました。

何を語るべきか？48年の伝道牧会を歩みを振り返って、多くの恵みの体験と、愛する兄弟姉妹の懐かしい笑顔が浮かび、あれもこれでも多くのことが思い起されまし。でも、限られた時間、一つのことだけを語って、皆様のはなむけとしたいと思えます。詩篇23・4の「キー アッター イマディ」（げに 汝 われと共にいます）という言葉。この有名な詩篇23篇ですが、この詩には不思議なレトリックが隠されているというのです。ユダヤの言葉でYHWHHという（聖4文字）、テトラグラマトンは「26」という数字にもなりま。ユダヤには数字がなかったの。文字が数字にも使用されることと真ん中は「キー アッター イマディ」（げに 汝 われと共にいます）という言葉があり、この言葉の前に26文字、後も26文字となりま。この詩はYHWH

イエスは「それがあから、それを私のところに持って来なさい」と言われたのです。伝道者は、遣わされた場で、今、そこにいる信仰者を主イエスのもとに導く務めを担います。
〔愛される平安、愛する喜び〕
昨年召された方々は、教会の皆さんから愛されてきました。そして、主イエスの「受けるよりは与える方が幸いである」（使徒20・35）とのお言葉通りに、周りの方たちのことを覚えて祈り、愛し、支えておられました。
「人は愛されることによって平安（安らぎ）を得、人を愛することによって喜びを得る」との言葉を聞いたことがあります。信仰者は、主なる神さまに愛されている平安の内に、他の人を愛すること

によって、まことの喜びを得る恵みを与えられます。
伝道者も同じです。教会の祈祷会などで、私はよく祈っていただけではありません。正直なところ、少々照れくさい思いもありますが、本心にうれしく思います。そして、聖霊の力が満ちて来る思いが与えられます。その祈りに支えられて、日々、福音伝道に励んでおります。
私たちが遣わされる場には、主を信じ愛すること、そして、教会に仕えることを一つのこととして、日々信仰生活に励んでいる信仰者がいます。その一人ひとりと共に、主を愛し、教会に仕えて、伝道に励んでまいりましょう。

「主を愛し、教会に仕える」

日本基督教団 総会議長
雲 然 俊 美



〔主を愛し、教会に仕える信徒〕
昨年、近隣の教会において、生涯、主のみ前に忠実に歩み、教会に仕えた信徒の方々が相次いで天に召されました。皆さんご高齢で、その内のお一人は、戦後アメリカから届けられたララ物資配給の手伝いをしたことがきっかけとなって教会に足を運び、洗礼を受けたとのことでした。私はその方々との交わりで、主を愛し、教会に仕えるということをお教えされました。

その方々は、ご自分が所属しておられる教会だけではなく、近隣の教会や地区・教区の集会等の活動においてもご奉仕されました。そのような奉仕しておられるお姿から、私は、教会は単独で立っているのではないこと、そして、他

の教会と共に立ち、共に福音伝道に励むことの大切さを教えられました。
〔キリストのもとに導く〕
私たちは、しばしば、自分が遣わされた場で、不足していることばかりが目につき、気になって、何とかしようとしてしまいます。けれども、それぞれの教会には、華々しくはなくても、主を愛し、教会に仕えている信徒がいます。
大勢の群衆に食べる物を与えなさいと言われた弟子たちは、「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」と答えました。しかし主イエスは、「それをここに持って来なさい」と言われ、そのパンと魚を用いられました（マタイ14・15-21）。弟子たちは「これしかありません」と言いましたが、主

という言葉が後ろにも前にも、そして真中にも満ちているということです。
コリー・テン・ブーム女史の証しです。彼女の家族は、ユダヤ人をかくまったということだけで、家族全員がナチスの強制収容所に送られました。彼女も家畜列車に乗せられて、収容所へと送られたのです。彼女は密かに縫い込んだ新約聖書に触れながら祈りま。した。「主よ、共にいて助けてください。今恐ろしい家畜列車の中にいます。」やがて、祈りの中で、輝く主の臨在を感じて、その列車の中で平安で満ちたというのです。彼女はこう書いています。
「わたしは主の臨在を感じて、信仰に満たされ、たとい、本物の地獄であっても、恐れずに行くことができる！」と確信した、と。

「教会を建て上げる礼拝」



日本基督教団 銀座教会 牧師 高橋 潤

1980年1月に「礼拝論」を主題に開催された東京神学大学教職セミナーの講演が東神大パンフレット20号「礼拝論」として発行されています。竹森満佐一名誉教授の主題講演で問題にしているのは「礼拝はなぜ必要か」ということです。この問いの背景にはヨーロッパの教会で一握りの人しか礼拝が集まらない現実が指摘されています。竹森は礼拝がなぜ必要なのかスイスの礼拝学者アルマンの書物を紹介しています。アルマンは、礼拝がなぜ必要なのか、第一にキリストが礼拝をお立てになられた。聖餐の時「わが記念としてこのように行え」と言っておられるからだ。第二に聖霊の業だから、第三に救いが働くひとつの道だから。第四神の国が来ていないから、という説明を紹介しています。この竹森講演から学ぶべき大切なことは、教会を建て上げる礼拝とは、

洗礼と聖餐、すなわちサクラメントと説教との関係から礼拝を考えなければならぬという礼拝成立の筋道を理解することではないかと思えます。

礼拝と聖餐

歴史的に聖書と礼拝はどちらが先か。新約聖書が書かれるまでに聖餐はすでに主イエスに関することをその弟子たちに明らかにしていました。主イエスの人格、メシアとしての救い、奇跡、主イエスの死、主イエスの贖い、これらは聖餐のうちに福音書が書かれる前に与えられていたのです。福音の内容は、新約聖書が編纂される

以前に、礼拝（聖餐）があらゆることを教えてきたのです。礼拝が必要である理由は、礼拝が歴史的にも聖餐によって主イエスの救いの御業が語られてきたということとを弁えることです。歴史的に礼拝がパン裂き（聖餐）との関係から生まれてきたことに目を向けたいと思えます。

礼拝が成立した根拠は主イエス・キリストの十字架と復活です。礼拝がはじめられたのは、人間の自然的な祈りや願望ではなく、神がお与えになったキリストの救いの業であったのです。この救いの業がなかったら、我々は礼拝を必要とは考えられなくなるといふことであり、そのことを聖書が明らかにしているのです。礼拝の中心は、神の救いの業であり、その全体を新たに思い起こす（アナムネーシス）ことです。

御言葉を語る権威

東京神学大学を卒業し修了して伝道者になるといふことは、この礼拝の責任を担うことです。最も大切な務めは御言葉を語る説教者としての務めを生涯担うことです。どうして「私」が神の言葉を語る事が出来るのでしょうか。それは、私たちが勉強して力を付けて、話術を尽くして語るのではなく、神が「私」に御言葉を語り伝える「権威」をお与えになるからです。

出エジプト記2章に、モーセが同胞のために立ち上がって、同胞のヘブライ人を強制労働させていたエジプト人の監督を殴り殺した

とあります。この正義心で立ち上がったモーセは、同胞であるヘブライ人から思わぬ言葉を浴びせられます。「誰がお前を我々の監督や裁判官にしたのか。」と。ここで問題になっているのは、神の権威の由来です。モーセは答に窮しました。自分を越えた聖なるお方に由来する権威を受けた体験も自覚もないのです。モーセは王の追及を恐れ、逃亡生活をします。この逃亡生活、荒野の生活がモーセに対する神の教育・訓練になりました。モーセが聖なる者とされる道が備えられました。

神はモーセを指導者として立てて下さいました。モーセが先頭に立つ出エジプトの目的は、出エジプト記5章に記されているように荒野で礼拝をささげるためでした。

主イエス・キリストは、マタイによる福音書9章において罪を赦す権威をゆだねることについてお語りになりました。「人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美した。」

福音書に記されているように、主イエスは多くの人々を癒やされました。主イエスの癒しの業は「罪を赦す神の権威」を現す出来事です。主イエスは神の権威の地上における代行者です。神の権威が主イエス・キリストを通して、弟子たちへそして教会に委ねられてきたのです。この神の権威を通して、日本基督教団が教師を立て、教師が聖礼典を司式します。主イエスの罪を赦す権威を見て、恐れつつ

も「人間にこれほどの権威をゆだねられた神を賛美」するので。

准允・按手

日本基督教団が教師を立て、准允、按手を授ける権威は、主イエスを通して、キリストの体なる教会に与えられている「罪を赦す神の権威」なのです。

マタイによる福音書21章では、祭司長たちが主イエスのところにきて、「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を与えたのか。」と聞いています。主イエスを人間としてしか知ることができない祭司長や民の長老たちには、三位一体の神である主イエスが現す、罪を赦す権威の由来が分からないのです。私たちは、主イエスは神が人となった神であることを信じています。このことが見失われると、教会の権威、聖礼典を執行する権威、神への恐れ、罪の赦しの権威が分からなくなり、教会が教会でなくなる危機に陥るのです。

説教の命

神が御言葉を語る力を与え、私たちを立てて下さいます。ここに命の絆があります。御言葉を語るために説教準備をします。現在は様々な誘惑があります。文章を整えることも難しくありません。しかし、AIや誰かの言葉には語る「私」の命はないのです。どんな苦勞も惜しまず、命を込めて御言葉を語る者へ召して下さる神を信頼して、伝道者の道を歩まれるようにお祈りします。

「教会を建て上げる礼拝 プロテスタントにおける リタージカル・フォーメーション」



カンバーランド長老キリスト教会 田園教会 牧師・日本聖書神学校 教授
荒瀬 牧彦

1. 教会形成としての礼拝形成

リタージカル・フォーメーションという視点から考えてみよう。プロテスタントにおけるそれは、礼拝を作り上げていくプロセスを重んじ、リタージへの参加の意識を高めていくことを通して、個々の信仰の成長と教会形成、さらには宣教の力としていこうとする試みである。砕けた言い方をすれば、「礼拝大好き」人間を増やしていき、礼拝へのより高い期待を醸成し、その空気の中で教会を活性化させていくための総合的フォーメーションである。

礼拝は、「退屈だが義務として厳守すべきもの」でなく、「自分たちをワクワクさせ、新しくしてくれるもの」のはずだ。「礼拝が中心」と言いながら、その礼拝の中心には知識も関心も持っていないということが多いのではない。礼拝に関してもっと欲張りでありたい。

2. 礼拝の持つ二極の緊張関係

キリスト教礼拝の中には安定と挑戦という二つの極がある。由木の言葉でいえば、祭司的原理と預言者の原理である。いつも変わらない礼拝が故郷のように受け入れてくれるという安心・安定は、宗教の重要な貢献である。それは生活のリズムを作るルーティンであり、土台を据えてくれる。同時に、礼拝は日常の中に出現する非日常であって、人間の築く城に上から下から神の国の到来をもって揺さぶりをかける挑戦である。この二極性の故に礼拝は、「私たち

の礼拝」であり、しかし「完全私物化」してはならないものなのだ。

3. 礼拝は共同の行為でありドラマである

①礼拝はレイトウルギア
キリスト教礼拝は本質的に共同の行為だ。レイトウルギアという言葉はラオス(民)とエルゴン(仕事)から成り、民の業としての礼拝の本質をよく示す。

②礼拝とはドラマへの出演

「礼拝することは、福音を余すところなく豊かに、しかも簡潔に、再現[reenact]・再演」することである」と私の教派の礼拝指針にある。礼拝はリタージカル・ドラマであり、礼拝者は観客ではなく、神と民が出会う相互的な行為に、司式者と共に関わるキャストである。出演者であるという自覚がもたらすものは大きい。観客は見たい部分だけのつまみ食いもできる。しかし出演者は幕が開く前の緊張から始まり、派遣と祝福をもって送り出される終演まで、「礼拝全体を通して福音が響くドラマ」の中に演者として没入する。

礼拝にも(明瞭に、あるいは不明瞭に)存在する基本的な形がある。G・レイスロップがHeloと呼ぶのものである。配布資料の「諸教派の礼拝順序」を見て、共通する構造を見いだして頂きたい。

礼拝は(名称は教派により異なるが)招集・御言葉・食卓・派遣という四部からなる。礼拝者は、先行する神の行為への応答として礼拝行為をなさげる。(イザヤ6・1-9に見られる「礼拝のイザヤモデル」参照)礼拝順序は神と人間の交わりにおいて起こっていることの反映であり、対話の凝縮である。リタージカル・フォーメーションの一つの課題は、礼拝ドラマの持つ対話性を皆が体感できるような礼拝をめざすことである。

リアン・ダイク編『より深いハレルヤへ…神学と礼拝のハーモニー』は、礼拝順序に従って、開会の部では三一論、罪の告白と赦しの部では罪論・恩寵論、といった仕方で礼拝と神学を結び付けて論じ、礼拝に内在している神学教育の力を教えてくれる。

5. 賛美歌の重要性

ともすると聴き手だけにされてしまう礼拝者にとって、歌う行為はリタージ参加の重要要素である。なぜ賛美を「歌う」か、なぜ「この歌」をここで歌うのか、これを歌う(祈る)ことは自分にとってどのような責任・使命を与えるか――それらを自覚して歌うなら皆がよい祭司としての働きをなすことになる。そのためには、礼拝計

画者が一つ一つの歌を、前後の文脈をよく踏まえて賢く選択することが必要だ。適切な歌を選ぶためには賛美歌のソースを幅広く持っている必要がある。「新しい歌を主に向かって歌え」。この挑戦を恐れず受けてほしい。賛美にも安定と挑戦という二極の緊張関係が必要なのだ。

6. 自分たちの礼拝を検討するための視点

J・ホワイトが言うように、プロテスタントの貢献は、新しい礼拝スタイルを加え、多様な表現に教会を開いてきたことである。各スタイルが重んじている礼拝の価値がある。自分の礼拝伝統は神との交わりを礼拝のどこに最も強く見ているか。歴史と神学をふまえた上で、自分たちの強み(活力)と弱み(沈滞)を考えてみる作業をお勧めしたい。その際、外からの視点も加えて検討するのが不可欠だ。教会は自己充足でなくこの世への宣教のために存在するのだから。私たちの礼拝はどれだけ包括的だろう。会衆構成はどれだけ人間の多様性を反映しているか。同時代の痛みと祈りをどれだけ内包しているだろう。礼拝を考えるのは即ち教会を考えることなのだ。

4. 礼拝順序の持つ意味

教派や土地の文化等により多様な礼拝スタイルがあるが、どの礼

「The body of Christ ～教会を建て上げる教会～」



日本基督教団 総会議長 雲 然 俊 美

〈教会を建て上げる務め〉

日本基督教団（以下、教団）は、旧教派の歴史的特質を尊重する合同教会で、教団信仰告白を告白し、教憲・教規の定めるところに従って合同教会の権能を行使するキリストの体なる教会である。

教団信仰告白において、「教会は主キリストの体にして、恵みにより召されたる者の集ひなり。」と告白する。神を信じる者たちが集まり、力を合わせて教会を形成するという以前に、主なる神に召された者たちが、神の恵みに応えて、それに連なる肢とされる「キリストの体」（エフェソ書23）を形成し、神に栄光を帰し、賛美する礼拝をささげ、その本来の務めである福音伝道に励むのが教会である。

教団信仰告白において、教会が担うべき務めとして、「公の礼拝を守り、福音を正しく宣べ伝へ、バプテスマと主の晩餐との聖礼典を執り行ひ、愛のわざに励みつつ、主の再び来りたまふを待ち望む。」と告白する。この基本線を保ち、教会は、時代のただ中で、自らが建っている地域の課題を共に担いつつ歩みを進めている。

教会は、「イエス・キリストという既に据えられている土台」（Iコリント3・11）の上に、①聖書（正典）、②信仰告白（信条）、③教職制度（職制）を柱として建て上げられる。教会を建て上げる務めは、「教会形成と言うよりは、教会建設である」（竹森満佐一）。

〈共に教会を建て上げる喜び〉

①共に礼拝へと招かれる恵み
神に召された信仰者は、神の招きに応えて礼拝に集い、礼拝から遣わされて信仰の歩みをなす。

礼拝で語られるキリストの十字架の贖いによる罪のゆるしと死からの復活の福音により、罪を悔い改め、洗礼へと導かれ、聖餐によってキリストの命にあずかる。

信仰は生活の土台であり、生活は信仰の実りである。「礼拝を守るあなたが守られる」のである。

②共に教会を建て上げる喜び
洗礼を受けて神の子とされ、キリストのものとされたキリスト者として、それぞれの教会に所属し、キリストの体なる教会を建て上げる喜びに共にあずかる。

教会は、一人ひとりが主イエス・キリストに結ばれている群れであり、教会における交わり形成の土台は、一人ひとりが主イエス・キリストとの確かな交わりの内に生きていくことである。

③共に福音を宣べ伝える希望
キリスト者は、礼拝から遣わされ、礼拝へと至る一週間の旅程において、神のみこころに従い、神に喜ばれる歩みをなす。キリスト者は、集められるために遣わされ、遣わされるために集められる。

教会は、他のキリスト教会と共に、福音を宣べ伝え、神の恵みを証しし、主にある希望と神のシャローム（平和、平安）を携え、この世において和解と執り成しの務めを担う。

〈教会を建て上げる教会〉

教会の務めは牧師や伝道師だけが担うものではなく、教会全体で担い合う（相互教会、チーム教会）務めである。

①失われた一人との出会い

主イエスは弟子たちと共に舟で湖を渡り、墓場を住まいとしていた人と出会われた（マルコ5・1～20）。その人は主イエスと出会い、正気になった。しかし、人々が主イエスにその地方から出て行ってもらいたいと言いつつ、主イエスと弟子たちはそこを立ち去った。

主イエスはこの一人の人と出会うために荒れる湖を渡られた。正気になったその人は、その地域の宣教者となった。

②共に神のみ前に立つ

教会とは、「神の言を、個人に伝達するため」（トゥルナイゼン）になされるわざであり、共に神のみ前に立つことを目的としている。教会の務めを担う者は、罪の告白をする人の心の声を聴き、受けとめ、深く共感しつつ、自らの罪の悔い改めを祈らざるを得ないことを知るようになる。

③教会の務めを共に担う

主イエス・キリストは、「七十二人を任命し……二人ずつ先に遣わされ」た（ルカ10・1）。

教会は牧師・伝道師だけの務めではなく、主に結ばれたすべてのキリスト者の務めであり、とりわけ、一つの群れであり、キリストの体なる教会の務めである。

〈教会の務めとしての教会〉

教会は「慰めの共同体」として、教会に来ることができない信徒を訪ね、共に祈るなどして、主にある交わりの恵みにあずかる。

①「慰めの共同体」の形成

礼拝において、自らの罪の悔い改めをもってキリストのみ前に進み出る者に、主イエス・キリストによる罪の赦しが宣言される。

教会は、主イエス・キリストによる罪の赦しをいただいた者たちが、共に主のみ前に立つことによって、相互にキリストの愛をもって受け入れ合う「慰めの共同体」を形成する。

②教会における相互教会の実践

教会全体で牧会的な関わり方について学び、その中の何人かの信徒で「ミニストリー・チーム（牧会チーム）」を設けておくことはとても有益である。

また、牧師・伝道師が信徒宅を訪問する時や病氣見舞いに出かける時、あるいは、信徒が召された場合の葬儀の打ち合わせの時など、できるだけ信徒（役員）が行うことがよい。

③神の国を証しする教会の形成

教会は神の国そのものではないが、神の国の恵みと豊かさを証しする群れである。教会員それぞれの賜物を十分に活かして、苦しいことや悲しいこと、悩みや不安があっても、主にある忍耐をもって共に歩み続ける健やかな信仰に生きる群れの形成を目指す。

「日本教の極点：母子の情愛 ——私の日本人論探究」



日本基督教団 戸山教会 牧師・青山学院大学 名誉教授
西谷 幸介

「日本人とキリスト教」というテーマを論じる際に、前者と後者の関係の議論が行われ、そこでよくH・R・ニーバーの『キリストと文化』の五類型論が利用されますが、そうした議論への私の懸念は、「日本的なるもの」を真に把握しないまま、何かそれらしい結論を論じているとさえも、結局は不毛ではないか、ということでもありました。

一九六八年、東神大への入学の際、教授会で述べた抱負で、「わたしは……できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。ユダヤ人にはユダヤ人のようになつた。使徒パウロの言葉を引用しました。その際の第一の力点は「わたしはどんな事でもする。共に福音にあずかるためである」にありましたが、第二は「日本人には日本人のようになる」というものをよく知りたい、知るべきだ、という点にありました。

私の日本人論は『日本教』の極点——母子の情愛と日本人』と『日本教』の弱点——無責任性と日本人』の前後編にまとめられております。私の確信は、日本人の暗黙の宗教として「日本教」という宗教は厳として存在する」という山本七平の命題と共にあります。この「日本教」概念に基づき、そこに森有正、河合隼雄、土居健郎、中根千枝、丸山真男等の日本人をめぐる優れた洞察を取り込み、日本人がその心性においても歴史においても「母性原理社会」を形成してきたことを跡づけ、その内奥に「母子の情愛」という究極価値（テイリツヒで言えば「究極的関心」）が存在すると論じたのが私の日本人論です。

「臓器は」あげるのはいいが、もらつてはいけない」これだけ聞けば不合理極まりない響きの言葉ですが、背後に日本人に根強い、「恩」をめぐる固有な考え方が潜んでおり、そこから即ち、ほぼ無意識に——出てきております。この「恩」をめぐる日本人の複雑な心情構造——から、第三者間の臓器移植一般への強力な否定性（移植法完備諸国間では極度に低い手術件数）と、血縁者間の生体肝移植への積極性（当初手術件数は世界一）という両極現象が生じております。

こうした日本人の性行がその独特な「恩」観念に基づくというところに気づかせてくれたのが、山本の第三作目『日本教徒』でした。彼によれば、不斎ハビヤン版『平家物語』四巻は、ハビヤンが「外国人宣教師に日本語と日本文化を学習させる目的」で原本一二巻を翻案編集する中、「日本人……の自己主張」を行なった「非常に珍しい例」です。従来の日本人の著述は外来思想への「破文」即ち批判的破綻部分のみでしたが、上記作品は日本人の考え方を積極的に言語化し訴えた初例と言つてよいものでした。それが日本人の「恩」論

山本はそこに、①人は恩の貸借関係を無視してはならない（報恩を忘れるな）、②恩は施すにも受けるにも権利ではなくあくまで義務だ、という二大原則を見届けました。それゆえ、日本人は、第三

者間で報恩困難な臓器移植には躊躇し（待機者には「あさましい」とさえ非難し）、血縁者からの生体肝提供には恰も債務であるかのように応じるわけです。ところで、山本は、この恩論は「日本教の倫理的基準」だと述べました。これにテイリツヒの命題「宗教は文化の内実、文化は宗教の形態」を当てはめると、上記恩論は日本教から派生した日本文化の一部ということになります。文化とは宗教的究極価値に影響された人為的所産の全体であり、倫理もその一部だからです。ただ、山本は、「日本教の中味は日本人を魅了する「人間味」という価値観であり、従つて神学はなく人間学のみだ、と説明してただけでしたので、私としてはその内実をより特定する必要ありと考え、彼が上記第三作で詳述した日本人の「血縁」観をさらに突き進め、恩論のそれこそ母胎として親子と母子の情愛が横溢している、と論じたわけです。これが私に言わせれば、日本教の「極点」です。森さんと土居さんの言葉をお借りすれば、日本人にとつて久しく「憧憬」と「感動」の対象となつてきたものです。

そして、これが、各論併記で終わつていた感のある、森さんの「二人称関係」、土居さんの「甘え」、中根さんの「タテ社会」といった、日本文化をめぐる優れた幾つかの洞察を総合しうる「優勢的視点」ではないか、と考えたわけです。この日本人固有の宗教的究極価値から、日本人自身さえも理解できない日本文化の諸現象の「なぜ？」がさやかに見通せてくる、というのが、私の日本人論が辿り着いた確信の一つです。決定的と言つてもいいかもしれませんが、有力かつ不可欠な視点と考えます。

天皇家と摂関家の「輔弼（丸山）関係に支配された「律令的天皇制」

（上山春平）という国家構造が今なお日本人の心性に影響し、それが日本人の「無責任性」の揺籃となつている、というのが、後編における私の議論でした。この研究に当初より関心を寄せ、助言と励ましを与えて下さった、並木浩一先生が「本書における西谷の寄与は——こうしうしうの政治構造を「母性社会」における母子の情愛の観点から解釈し抜いたことにある」と評して下さいました。女帝持統天皇の子孫愛に乗じて藤原不比等が敷いた摂関制の経緯とそれを今も引きずる日本人の政治的社会的感情は、けつして単なる歴史の偶然ではなく、日本教に基づき展開された日本史の或る種の必然であると考えております。

しかし、これは変えうるものであるから、変える勇気をもって、キリスト教伝道に邁進し続ける、というのが、私の福音伝道者としての信念です。

拙著に触れて、「いや、日本は父権社会だよ」とか「日本人はそんなに無責任じゃない」といった感想を、少々ムキになって述べられる方がおられます。勿論そう言えないこともありませんが、と言つてお返ししておりますが、これは「民族特性 national feature 論」——日本人はどちらかと言えばこうだ、という議論——であり、その先に在るべき人類の「人間本性 human nature 論」を目指す努力だということを理解頂ければ、有り難いことと思えます。ただ、民族特性論はそれでも十分に有意義であり、現今ではことに必須なものだと考えます。

「旧約聖書における祈り： 執り成しの祈りを中心にして」



東京神学大学 教授 田 中 光

はじめに
旧約学ではこれまで、例外を除いて、「祈り」という主題はほどこ置き去りにされてきたと言っても過言ではない。しかし、1990年代以降、主に英語圏を中心に、旧約における祈りの主題をより包括的に研究する流れが生まれ始めた。例えば、S. E. Balentineの研究はこの点で大変注目値する研究であり、これまでの偏った研究の方向性（例えば祈りの歴史的發展のみに注目するなど）が是正されることとなった。

それでもやはり祈りは（特に日本においては）マイナーな研究テーマであり続けており、しかも、祈りが取り上げられる際は、依然として詩編のみが取り上げられることが多い。詩編はどちらかと言うと詩人自身のための祈りが中心となっている。一方、旧約全体、特に物語のジャンルに目を向けると、モーセやダビデといった主要な登場人物たちの祈りは、自分以外の神の民へとむけられた執り成しの祈りであることが明らかとなり、しかも物語の展開上重要な役割を担っている。そう考えると、執り成しの祈りを探究する必要があることは明らかであろう。そこで、本講演は、重要な先行研究である M. Widmer による浩瀚な研究と対話しつつ、旧約の執り成しの祈りについて考察してみたい。

1 執り成しの祈りを巡る緒論的考察
旧約における祈りとは、Balentine によれば、「神との明確なコミュニケーション」であると定義される。しかし、一方では、祈りの場面が直接登場しなくとも、祈りが暗示される。更に言えば、通常祈りとはカウントとされ

ないような営みもまた、「明確な」神とのコミュニケーションではないかもしれないが、一種のコミュニケーションと理解されることもある。例えば黙想（詩1・2）、沈黙のうちに神を待ち望むこと（2・1）などは、神とのコミュニケーションと解し得る。

その上で、祈りの中でも、執り成しの祈りとは何かと考えるならば、それは誰かに代わって、主に神に対して、何かを願ひ出る行為のことであるとと言えるであろう。それは勿論、明確な祈りの言葉を通してなされる場合が多いが、例えば祭儀行為を通して執り成しがおこなわれる場合も見られる。祭儀における執り成しは多くの場合、犠牲を献げることによってなされるが、祈りの言葉などが記されることは少ない。しかし、先ほどの祈りの定義に従えば、こうした祭儀行為も、広い意味での祈りと解し得るのである。

ところが、旧約において執り成しが表現される際には、いつも同じ語彙が用いられることはなく、様々な語彙が用いられている。一つだけ例を挙げると、動詞「ハラー」は、基本的にはこの動詞の殆どの語幹の意味は病や弱さに関係しているが、この動詞のピエル形だけは「嘆願する」を意味し、執り成しの意味で用いられることがある（出32・11・王上13・6など）。つまりこの動詞は、執り成すことを、弱くなること、病を担うこととして理解している可能性がある。しかし、旧約における執り成しをより神学的に把握するに際しては、執り成しを意味する語彙によってそれを把握するだけでなく、同時に、執り成しを行う主体

がどのような職務を帯びているかを把握することが極めて重要であると考えられる。そこで、執り成し手の職務に従って執り成しの種類を分類してみると、①祭儀的執り成し（レビ記の祭儀規定、イザヤ書の苦難の僕など）、②預言者の執り成し（モーセを雛形として預言者ら）、③王的執り成し、④詩編における執り成し（レビ人？）、⑤その他（ヨブ、アブラハムなど）と区分できよう。2026年3月発行の『伝道と神学』16号では、これらの区分に基づいて、代表的なテクストを積義的に考察しているので参照されたい。以下においては、②預言者の執り成しに属するモーセの執り成しの積義的考察を一部紹介する。

2 鍵となるテクストの積義的考察
預言者の執り成しの祈り（出32・34章）

モーセの執り成しの祈りは、文脈から言うと、金の子牛事件との関わりで提示されており、また Widmer の区分に従えば、次の一連の四つの祈りから構成されている。すなわち、第1の祈り（出32・10-14）、第2の祈り（出32・30-34）、第3の祈り（出33・12-23）、そして第4の祈り（出34・8-9）の四つである。

以上において、特に重要なものが第3の執り成しである。ここにおいてモーセは、単に民のために罪の赦しを請うことを超えて、自分自身が主なる神と人格的な関係を結ぶことを願って祈り願っている。例えばモーセは「今、もしあなたの目に適うのなら、あなたを私に教えてください」（出33・13）とか、「どうかあなたの栄光を私にお示しくください」（出33・18）と言って、自らが主を

深く知ることを願ひ求めている。Widmer はこうしたことから、ここではモーセが執り成しを深く祈るにつれて、モーセ自身が神の神秘へと導かれていると指摘している。そして実際、神はモーセに自らを示した（出34・1-8）。神は自らを憐れみ深く恵みに満ちているが、同時に罪を罰せずにはおかないお方としてモーセに啓示されたのである。このように、モーセの執り成しの祈りは、モーセ自身の神経験（ひいては聖化）と切り離すことができない。

この神の顕現を受けて、モーセは最後の（第4の）祈りをささげる。そこにおいて印象的なことは、モーセがあくまで民と自分を一体的に認識しているということである。モーセは自分と民のことを含めて「私たち」と言い、その「私たちの過ちと罪」を赦してほしいとさえ言うのである（出34・9）。ここにおいてモーセは、自らを民と完全に一つと理解しており、言わば民の罪を自ら引き受ける形で、神に執り成しを祈り願っているのである。

結論

祈りが旧約学においてあまり取り上げられていない現状に鑑みて、本講演では特に執り成しの祈りにフォーカスして考察を深めた。執り成しの祈りにも多様性があるが、本講演では、特に預言者の執り成しの実例としてモーセの執り成しの祈りを紹介し、そこにおいてモーセ自身が神を深く知るに至っていること、またモーセが民と自分を一体的に理解していることなどが明らかにされた。他の執り成しの種類については、前述の『伝道と神学』掲載予定の拙稿を参照されたい。

新卒業生の声



吉岡 優介



呂 寅讚



金井 恭子



内田幸四郎



小野恵理子



榊原かをる

主に与えられる「時」

榊原かをる

神学研修志望生として、学部3年計画にて、3年次に編入しました。新型コロナウイルス感染症ゆえ、在宅オンライン授業が続き、献身コースに転向を許されてからも、自称「訳あり学生」は、家族の都合を優先する、帰宅部の部活を重ねました。こんな我儘学生にも、神様はご計画を示して下さいます。昨年6月に家族都合から解放され、修士論文に追いついたところで、赴任が現実味を帯びました。最終学年、恐るべし。それぞれ時が満ちての最終学年は、級友と共に海綿となつて、全てを吸い込めんと貴重な授業に臨みました。東神大と教会を通して与えられた、主の豊かな恵みに心から感謝致します。

主に導かれて

小野恵理子

東京神学大学に入り、授業を受け始めたとき、神と人について学び、思索する神学こそ学問の中の学問だと実感しました。極めることなどできない広大な海のような世界ですが、進むたびに自分の小ささと主の大きさ、そして新たな発見と新たな問いに出会う探究の場でもあります。先生方は常に深い見地から教えてくださり、聖書に向き合う4年間は、かけがえのない日々でした。家族と教会の方々、クラスメイト、多くの方々のお祈りに支えられてきました。これまで導いてくださった主の恵みに感謝するほかありません。今後も主のみ声に従い、十字架の救いを証しするため、に過ぎないと思っています。

祈りへの感謝

内田幸四郎

この6年間の東神大での学び、また寮での生活を振り返ると、多くの方々の祈りに支えられていたことを深く感謝します。特に同じクラス仲間が見えないところで祈っていてくれることを感じます。私自身、この召命感の揺らぎやもう学びを続けることが難しいと悩んでいたときに、彼らが祈ってくれました。また教会の方々も同じであり、感謝しています。そして何よりその背後に主の執り成しと招きがあります。また自分自身も教会や学校で主に仕えようとされている方々のために、また今後献身者が起こされるよう祈り続けたいと思っています。

「祈りつつ歩む」

金井 恭子

東京神学大学での日々は、伝道者となるための土台を築く豊かな学びと交わりに恵まれたものでした。それを十分に活かす能力に不足がある私がここまで辿り着くことができたのは、多くのお祈りとお支えがあったからに違いありません。夏期伝道実習、卒業論文、教育実習、修士論文と、その都度、主は不思議な御力で乗り越えさせてくださいました。伝道者として相応しい資質と能力が十分ではない不安を覚えつつも、主が「行きなさい」と仰るなら、祈りつつ一歩一歩進んでまいります。これまで支えてくださった先生方、職員の皆様、学友に心から感謝いたします。誠にありがとうございます。

「導きの中で与えられた学び」

呂 寅讚 (ヨ インちゃん)

東京神学大学大学院での学びを通して、神学とは単なる知識の習得ではなく、神様の御言葉に誠実に向き合い続ける営みであることに深く学びました。先生方の丁寧で熱心なご指導と、共に学ぶ仲間との真剣な対話を通して、自らの信仰を問い直し、神学的に考え続ける姿勢が養われました。また、日々の礼拝と教会での奉仕の経験を通して、神様が今も生きて働いておられることを実感することができました。この場所で与えられた多くの出会いと学びに心より感謝し、これからも神様に導かれながら教会に仕える者として忠実に歩んでいきたいと思っています。

神学の麓に立って

吉岡 優介

2022年に東神大に入学してからあつという間の4年間で、神学の「し」の字も知らないあの頃から思えば、「し」の字ぐらいいはわかるようになった気がします。しかし、「く」の字からはむしろ遠ざかったように感じます。遠くからは全景の見えていた富士山が、麓まで来ると途方もない高さに見えるようなものでしょうか。ひとつ言葉を覚える度に、ひとつ神学者の主張を聞く度に、神様を知ることはいくらも難しいものかと思われました。それでも世々の神学者は歩みを止めませんでした。イエス・キリストへの信仰があるからです。卒業しても、一歩ずつ神様を知る道を歩みたいと思っています。

「神学」87号 発行のご案内

神学会委員長 本城 仰太

「神学」87号が2025年12月に発行されました(定価3,400円+税)。主題は「祈り」で、2026年1月の「教職セミナー」の主題も同じです。祈りは実践が重要なものという点でもありますが、祈りの神学というものは他の神学のトピックに比べると論じられることが少ないかもしれません。本号では本学の5名の教員による様々な分野からの神学論文が寄せられています。祈りの神学を深めるために大いに用いられることを願っています。自由研究として、継続して執筆が続けられている教育に関する論文が長山道先生より、「フアリサイ派」の詳細研究に関する論文が河野克也先生より、2025年9月に行われた後期始業講演が宮寄憲先生より寄せられています。また、博士後期課程で研究を継続している学生の修士論文の要約も掲載されています。

【主題論文】

Living Prayer: The Quest for Life-giving Communion with God and Others Wayne A. Jansen

旧約聖書における祈り(前編)―執り成しの祈りの考察を中心にして 田中 光
古代教会における「主の祈り」―テルトウリアヌス「祈りについて」の翻訳 本城 仰太
第一テサロニケ書簡におけるパウロの祈りと終末論 山口 希生
カイサリアのパシレイオスの祈りとその理解についての一考察―カルヴァンとの比較と共に 飯田 仰

【自由研究】

教育が教育であるために (9) 長山 道

紀元70年以前のフアリサイ派の実像―新約聖書学における反ユダヤ主義克服の試み 河野 克也

【講演】

旧約聖書とエジプト 宮寄 憲

【修士論文要約】

カール・バルト「教会教義学・神論」における選びの教説―存在論、認識論そして信仰論 北田翔太郎

奨学金献金のお願い

東京神学大学のために日頃からお祈りとお支えをいただき、心より感謝申し上げます。

4月になると新入学生が与えられ、前期の歩みが始まっていきます。夏期伝道実習を経て、後期の歩みが続いていき、3月になると卒業生たちが全国の教会・学校・施設へ、伝道者として派遣されていきます。このような神学校の営みが続けられるのも、日頃から皆さまの祈りと献金によって支えられているからに他なりません。

東京神学大学では、全国からの伝道者派遣の要請に応えるべく、さらに多くの学生が入学し、所定の期間の学びを経て、多くの伝道者が卒業・派遣されていくことを願っています。東京神学大学もいわゆる「募集」に力を入れて取り組んでおり、以前と比べて数多くの「受験相談」の機会を設けるようになっていきます。その相談の際に、最も多く寄せられる質問の一つが経済的なことであり、具体的には「奨学金」のことであります。経済的に困窮している学生も多く、何とかやりくりをしながら歩んでいる実情があります。

そこで今、改めて皆さまに奨学金のための献金をお願い申し上げます。神学生が経済的に不安を覚えることなく歩めるように、また経済的な理由で入学や卒業を断念することがないように、祈りをもってご協力いただければ幸いです。東京神学大学の奨学金献金には、二種類の献げ方があります。

①「奨学金献金」は、経済的に困窮している学生に申請・審査を経て支給される奨学金です。「顔の見える奨学金」とも呼ばれ、毎年、献金者の皆さまに受給者がお礼状を出す努力も続けています。

②「入学時奨学金」は、入学年度の納入金（入学金、授業料、施設費など）が100万円を超えるため、入学時の経済的負担を少しでも軽減するために設けられた奨学金です。

神学生たちも、在籍教会や出席教会に経済的に支えられ、また学内外のアルバイトをするなど様々な努力を重ねていますが、十分ではありません。このような状況ですので、どうぞよろしく願いいたします。

奨学金委員長 本城 仰太

なお、お振込の際、「指定奨学金」の場合は「奨学金献金」、そして「入学時奨学金」の場合は「入学時奨学金献金」とご記入ください。郵便振込の口座は次のとおりです。

口座番号：00150-5-5032
加入者名：学校法人 東京神学大学

公開夜間神学講座のすすめ

学外活動委員長 長山 道

東京神学大学の公開夜間神学講座は、信徒のみならずのみなさんのための、長い伝統を持つ学びの場です。2026年度には80期生をお迎えします。この講座では、聖書について、教会の信仰についてはもちろん、歴史、芸術についてなど、神学のさまざまな分野をやさしく学ぶことができます。この講座で得た学びがご自身だけではなく教会のためにも、さらに世のためにも生かされます。神学は単なる知識の習得ではなく発見の連続で、教会生活も生き方をも変えます。公開夜間神学講座で信仰の仲間たちと共に、ぜひその一歩を踏み出してみませんか。

基本的に2年間で20講座を学ぶプログラムですが、ご自身のペースでゆっくり全講座を受講することも、興味のある講座だけを選んで聴講することもできます。また、すでに夜間講座を修了された方も、新しい講師が加わったり新しい講座が開講されたりしてありますので、改めて受講していただくことも大歓迎です。

お申し込みを心よりお待ちしております。

2026年4月開講 申込受付中

4月～5月

月…「キリスト教教理の基礎Ⅱ」

金…「福音書を読むⅠ」

5月～7月

月…「旧約聖書神学入門」

金…「カルヴァンと古代教父」

9月～10月

月…「古典派時代のミサ曲の発展」

10月～12月

金…「21世紀の倫理」

月…「牧会カウンセリング入門」

金…「旧約聖書緒論概説」

1月～2月

月…「信仰の問いに向き合う」

金…「パウロ入門」

▽会場…日本基督教団銀座教会

▽受講日…毎週月・金曜日

▽時間…午後6時～8時

▽受講料…1万2千円（1講座）

▽面談料…1千円（初めての方のみ）

◎定員（各講座30名）に達し次第締め切ります。

◎パンフレットをお送りいたします。

お問い合わせ・資料請求など

東京神学大学 学外活動委員会

（夜間講座事務局）

0422-132-4185

夜間講座HP



夏期伝道実習の実習生受け入れのお願い

今年も本学の夏期伝道実習を行いたいと願っています。夏期伝道は伝道者養成においてきわめて重要です。神学生はここで伝道者となるための訓練を受け、適性が吟味され、召命を問ひ直します。実習生を受け入れ、伝道者養成のわざをお助けいただければ幸いです。

他方、神学生の数が減っており、申し込みをしていただいても、すべての教会には実習生を派遣できません。数年に一度、実習生の派遣をお休みさせていただくことになります。どの派遣先にも均等に休みの年が回ってくるようになりますので、ご理解をお願いいたします。

1 (位置づけ) 夏期伝道は日頃の教育と訓練を大成する場です。学部4年次の実習への評価は、大学院への進学に際しての重要な判定資料の一つともなります。

2 (内容) 事前の指導をし、事後には教員と一対一での振り返りの面接をします。伝道者の使命は御言葉の奉仕にありますから、実習生がその機会を与えられて訓練され、また吟味されることを願っています。しかし、準備の過程で「この神学生には奉仕をゆだねられない」という判断が行われることはあり得ることだと承知しています。

3 (費用) 交通費、滞在費等は原則として教会でご負担くださるようお願いいたします。経済的な大きな負担をいただいていることを感謝します。場合によっては、交通費を本学が負担することもありますので、ご相談ください。

4 (申込) 4月末日までに本学教会実習委員会宛てに書面にてお申し込みください。定まった書式はありませんが、申し込み用紙が必要ならご請求ください。電子メールに添付して下さってもかまいません。宛先 kenkoizumi@tutsa.cjp

5 (期間) 8月2日～30日が実習期間です。学部4年生と大学院1年生を派遣します。(7月31日まで授業があります。後期は9月23日から)

6 (お願い) ①実習生の年齢、性別、所属党派、国籍は多様です。女性や年齢が高い者もいますので、宿泊環境、プログラム等を整える際、ご考慮ください。ご希望があれば、申し込みの際にお知らせください。②実習生は弱い立場にあります。人格が重んじられるように、配慮をお願いいたします。③上記のとおり学生が少なくなっており、一昨年は五カ所、昨年は三カ所にお休みをお願いしなければなりませんでした。派遣できない場合はご容赦ください。

東京神学大学 教会実習委員会 小泉 健

◆第七回日本伝道フォーラム開催のご案内◆

日時…2026年6月1日(月)～2日(火)

場所…東京神学大学

主題…「届けよう、福音を！日本伝道の明日を拓くために」

内容…主題講演、伝道報告、テーマ毎のワークショップ、分団協議などを予定。

昨年引き続き、日本伝道フォーラムを、東京神学大学のキャンパスを会場に開催いたします。日時は2026年6月1日～2日(月～火)です。昨年6月、コロナ後、久々に対面で開催することができました。今年も引き続き東神大を会場に、対面で開催いたします。今からご予定に入れていただき、近隣の先生も誘いのうえ、ぜひご参加ください。

一日目は、二つの主題講演を中心に、主題をめぐる良き学びの時を持ちたいと思います。夜は、夕食をとりながら、ワークショップを持ちます。テーマは以下のとおりです。「福音とは何か?」「伝道とは何か?」「伝道者とは何か?」「青年伝道とは何か?」それぞれ発題者を立て、まず発題を聴き、それを踏まえながら議論を深めていきたいと思ひます。

二日目は、まず午前中、二名の牧師から伝道報告を、そして二名の信徒からの発題をお聞きする機会を持ちます。その後、分団に分かれて、昼食を挟みながら、協議を進めていきたいと思ひます。これまでの学びを分かち合いつつ、それぞれの問題意識が深められる機会を持てればと願ひます。最後に再び全員が一つ所に集まり、そのしめくりとして祈禱会を持って、それぞれの持ち場へ派遣されてまいりたいと思ひます。

日本伝道フォーラムは、日本伝道、特に日本基督教団が抱えている課題、問題を取り上げながら、共に神学的に学び、同じ教会的ヴィジョンを与えられることを願う教職者たちの運動です。今回は新しく結成された準備委員の先生方によって準備されています。日伝フォーラムの運動がさらに豊かにされるよう、皆様のご協力を求めています。色々と皆様にお願ひすることがあるかと思ひますが、その節はよろしくご協力をお願いいたします。

近いうちに、詳しいプログラムをお知らせできたいと思ひます。東京神学大学のホームページなどを良くご覧ください、ご参加をぜひご検討ください。遠方からの参加者への交通費、宿泊費の援助を今回も行いたいと思ひます。それにつきましても、これから公開される情報を良くご覧ください。よろしくお願ひいたします。

問い合わせ先…

日本伝道フォーラム準備委員会 事務局(東京神学大学、中野)

学事往来

2月27日 2025年度大学院前期課程修了者、学部卒業発表

3月3日 3月入学者選抜実施日

3月5日 3月入学者選抜合格発表

3月5日 卒業礼拝 説教：阿佐ヶ谷教会 古屋治雄牧師

3月6日 卒業・修了式 告辞：神代真砂実学長

3月13日 公開夜間神学講座 修了式

4月1日 入学式・前期始業式

4月1〜3日 新入生・新編入生オリエンテーション

4月3日 公開夜間神学講座 開講式

4月6日 前期授業開始

4月15日 クラス別懇談会

3月6日 **【理事会関係】**
第569回常務理事会 東京神学大学

3月9日 第570回常務理事会 銀座教会

3月23日 第216回定期評議員会、第261回定期理事会 銀座教会

4月13日 **【後援会関係】**
第1回東京地区推進委員会 銀座教会

4月20日 全国委員会 銀座教会

3月9日 **【財政委員会関係】**
資金管理運用委員会 銀座教会

3月23日 定期評議員会、定期理事会

4月3日 公開夜間神学講座 開講式

4月13日 後援会東京地区推進委員会

4月20日 後援会全国委員会

柴田 福嗣人氏
2025年4月9日逝去されました。89歳。(1999年東京神学大学院修了)

宇喜多 克典氏
2025年9月21日逝去されました。89歳。(1976年東京神学大学院修了)

辺見 宗邦氏
2025年9月29日逝去されました。91歳。(1961年東京神学大学院修了)

高橋 真人氏
2025年11月14日逝去されました。62歳。(1993年東京神学大学院卒業)

公務出張

告知板

2026年度継続教育開講科目

受講資格：キリスト教会の牧師・伝道者
 授業開始：前期／4月6日(月) 後期／9月24日(木)
 申込期間：前期／受付は終了しました。 後期／7月17日(金)～7月30日(木)
 受講料：1科目(1学期分) 14,000円
 申し込み・問い合わせ：学外活動委員会(事務担当：教務課)

開講科目

- 旧約聖書神学
 - 前期
 - 旧約聖書学演習Ⅱ a (矢田 洋子 特任常勤講師) 火曜日Ⅴ限
 - 旧約聖書原典講読Ⅰ a (左近 豊 講師) 金曜日Ⅳ限
 - ヒブル語Ⅰ-1, Ⅰ-2 (宮寄 薫 常勤講師) 火曜日Ⅰ限 水曜日Ⅰ限
 - シリア語 a (佐藤 泉 講師) 金曜日Ⅲ限
 - 旧約聖書学特研Ⅱ a (田中 光 教授) 水曜日Ⅲ限
 - 後期
 - 旧約聖書学演習Ⅱ b (矢田 洋子 特任常勤講師) 木曜日Ⅰ限
 - 旧約聖書原典講読Ⅰ b (宮寄 薫 常勤講師) 木曜日Ⅲ限
 - ヒブル語Ⅱ (宮寄 薫 常勤講師) 木曜日Ⅱ限
 - シリア語 b (佐藤 泉 講師) 金曜日Ⅳ限
 - 旧約聖書学特研Ⅱ b (田中 光 教授) 水曜日Ⅴ限
- 新約聖書神学
 - 前期
 - 新約聖書原典釈義Ⅱ a (三永 旨 従 講師) 木曜日Ⅳ限
 - 新約聖書学特研Ⅰ a (河野 克也 特任准教授) 水曜日Ⅳ限
 - 新約聖書学特研Ⅱ a (山口 希生 特任准教授) 水曜日Ⅱ限
 - 後期
 - 新約聖書原典釈義Ⅱ b (三永 旨 従 講師) 木曜日Ⅳ限
 - 新約聖書学特研Ⅰ b (河野 克也 特任准教授) 水曜日Ⅰ限
 - 新約聖書学特研Ⅱ b (山口 希生 特任准教授) 水曜日Ⅲ限
- 組織神学
 - 前期
 - 組織神学特講Ⅰ a (須田 拓 教授) 金曜日Ⅱ限
 - 信条学 (須田 拓 教授) 火曜日Ⅲ限
 - 組織神学演習Ⅱ a (神代真砂実 教授) 金曜日Ⅴ限
 - 後期
 - 組織神学特講Ⅰ b (須田 拓 教授) 金曜日Ⅱ限
 - 組織神学演習Ⅱ b (神代真砂実 教授) 金曜日Ⅲ限
- 歴史神学
 - 前期
 - 教理史演習Ⅰ a (本城 仰太 准教授) 金曜日Ⅰ限
 - ラテン語Ⅰ (本城 仰太 准教授) 水曜日Ⅰ限
 - 後期
 - 教理史演習Ⅰ b (本城 仰太 准教授) 金曜日Ⅴ限
 - ラテン語Ⅱ (本城 仰太 准教授) 水曜日Ⅱ限
- 実践神学
 - 前期
 - 実践神学演習 a (小泉 健 教授) 木曜日Ⅲ限
 - 臨床牧会教育 a (W.ジャンセン 教授) 月曜日Ⅲ限・Ⅳ限
 - キリスト教教育特研 a (長山 道 教授) 火曜日Ⅰ限
 - アジア伝道論演習 a (飯田 仰 助教) 火曜日Ⅳ限
 - 後期
 - 実践神学演習 b (小泉 健 教授) 金曜日Ⅳ限
 - 臨床牧会教育 b (W.ジャンセン 教授) 月曜日Ⅲ限・Ⅳ限
 - キリスト教教育特研 b (長山 道 教授) 木曜日Ⅴ限
 - アジア伝道論演習 b (飯田 仰 助教) 火曜日Ⅳ限

2026年度 公開夜間神学講座

聴講生募集

1科目からどなたでも受講できます。

受講日：毎週月・金曜日
 時間：午後6時～8時
 場所：銀座教会
 定員：各講座30名
 受講料：12,000円(1講座)
 面談料：1,000円 (初めての方のみ)
 申込締切：受講講座が始まる 2週間前

◎パンフレットをお送りいたします。
 お問い合わせ・資料請求は
 学外活動委員会まで

2026年度 前期・後期科目等履修生

出願資格：福音主義のキリスト教会の教職またはそれに準ずる者で、教員免許取得のために本学学部科目の履修を希望し、教授会の選考によって許可された者。

出願期間：前期／受付は終了しました。 後期／2026年7月17日(金)～7月30日(木)
 申込に先立って、必ず教務課主任のガイダンスを受けること。
 受講料：1単位 20,000円
 審査料：10,000円
 申し込み・問い合わせ：教務課

村田 重氏

2026年1月8日逝去されました。76歳。(1977年東京神学大学院修了)

《学報第335号 お詫びと訂正》
 裏表紙計報欄 船戸 良隆先生の「船」の字が誤っておりました。お詫びして訂正いたします。

二〇二六年三月六日発行
 東京神学大学報・三三三六号
 〒181-0015 東京都三鷹市大沢三一一〇一三〇
 東京神学大学広報委員会
 電話 〇四二一三二一四一八五
 FAX 〇四二一三二一〇六六七
 郵便振替 〇〇一五〇一五〇三三二
<http://www.tuiss.ac.jp/>